

データセット概要

各変数については、調査概要を参照ください。

site：調査海域

point：調査地点

latitude：調査地点の緯度

longitude：調査地点の経度

year：調査年度

SPSSymax：調査年度に採取された最大 SPSS 値 (kg/m^3)

coral_spices_q：コドラート内のサンゴ種類数

coral_cover_q：コドラート内のサンゴ被度

coral_cover_a：コドラート周辺のサンゴ被度

調査概要

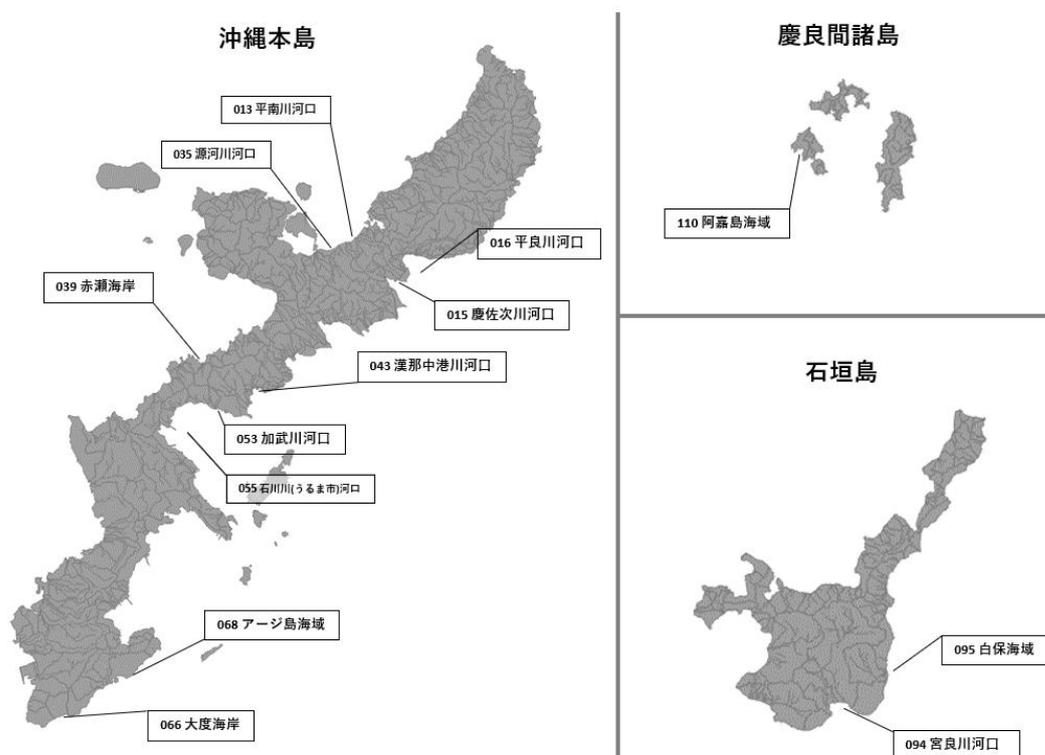
1. 調査内容

(1) 赤土等堆積状況調査 年3回(梅雨後、秋季、冬季)

(2) サンゴ類調査 年1回(秋季)

※梅雨後：6月下旬～7月上旬、秋季：10月下旬～12月中、冬季：1月下旬～2月中

2. 調査海域



3. 調査方法

(1) 赤土堆積状況調査 (SPSS※)

調査地点周辺3点から混合採泥した。採泥はダイバーが潜水により行った。底質から水中に散逸する懸濁物質を最小に抑えるように、スコップでゴムパッキン付プラスチック容器内に採泥した。また、調査地点の平均的な赤土等堆積量が把握できるよう地点周辺3点で採泥し、その混合物を試料とした。



SPSS 測定は、県衛生環境研究所報第 37 号 pp.94-104 に従い実施した。

下記 web サイトに掲載しています。

https://www.pref.okinawa.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/006/585/s37_13spss.pdf

※SPSS (Suspended Particles in Sea Sediment (海域底質中の懸濁物質含量))

海底や干潟における赤土等の堆積状況を判断するための指標として用いられており、9つのランクに分類できる。ランク1～5bまでは自然界由来による懸濁物質の発生が考えられ、ランク6以上の場合、明らかに人為的な赤土等の流出による汚染とみなすことができる。

SPSS kg/m ³			底質状況その他参考事項
下限	ランク	上限	
	1	<0.4	水中で砂をかき混ぜてもほとんど濁らない。白砂がひろがり生物活動はあまり見られない。
0.4 ≦	2	< 1	水中で砂をかき混ぜても懸濁物質の舞い上がりを確認しにくい。白砂がひろがり生物活動はあまり見られない。
1 ≦	3	< 5	水中で砂をかき混ぜると懸濁物質の舞い上がりが確認できる。生き生きとしたサンゴ礁生態系が見られる。
5 ≦	4	< 10	見た目ではわからないが、水中で砂をかき混ぜると懸濁物質で海が濁る。生き生きとしたサンゴ礁生態系が見られる。透明度良好。
10 ≦	5a	< 30	注意して見ると、底質表層に懸濁物質の存在がわかる。生き生きとしたサンゴ礁生態系のSPSS上限ランク。
30 ≦	5b	< 50	底質表層にホコリ状の懸濁物質がかぶさる。透明度が悪くなりサンゴ被度に悪影響が出始める。
50 ≦	6	<200	一見して赤土等の堆積がわかる。底質攪拌で赤土等が色濃く懸濁。ランク6以上は、明らかに人為的な赤土等の流出による汚染があると判断。
200 ≦	7	<400	干潟では靴底の模様がかっきり。赤土等の堆積が著しいがまだ砂を確認できる。樹枝状ミドリイシ類の大きな群体は見られず、塊状サンゴの出現割合増加。
400 ≦	8		立つと足がめり込む。見た目は泥そのもので砂を確認できない。赤土汚染耐性のある塊状サンゴが砂漠のサボテンのように点在。

(2) サンゴ類調査

1) 永久コドラート内調査

2 m×2 m の永久コドラート内（阿嘉島海域(110-No.1)のみ 4 m×4 m）において、サンゴ被度、サンゴ種数を記録した。

サンゴ被度は、コドラート内のサンゴ類分布図を作成し、図内のサンゴ類の面積により総被度を算出した。

サンゴ種数は、コドラート内に生息するサンゴを目視レベルで確認できた種数を記録した。



2) 永久コドラート周辺調査

永久コドラート周辺調査はコドラートを中心とした直径約 20 m の範囲内において、スポットチェック法に準じて調査した。サンゴ被度は、目視レベルで記録した（0%、2.5%、5%、10%、20%、以降は 10%ごとに記録）。